

続 櫻の木の下で (42)

阿木津 英



十一月五日、六日と二日間の創刊十周年記念大会を終え、まだ疲れもとれない日に「父、三郎儀、九十一歳にて」と書き出しのある葉書が届いた。篠原三郎さんだった。

もしかしたら記念号を読んだ感想が届くかもしれないとひとそかに心待ちにしていたのだが、届いたのは訃報だった。

*

篠原三郎さんから初めて手紙をいただいたのは、もうずいぶん昔である。學藝書林から出た江種満子・井上理恵編『20世紀のベストセラーを読み解く——女性・読者・社会の100年』に、わたしの書いた『サラダ記念日』論を読まれてのことだから、二〇〇一年あたりだろう。「消費社会に馴致された感性の出現」という副題をもつこの論は、『サラダ記念日』をプロデュースした河出書房新社の編集者長田洋一氏に出会

いから販売戦略まで一部始終をインタビュートし、読者分析・作品分析を加え、市場経済と歌集という角度から論じたもので、篠原さんは、これをたいへんに評価してくださった。

経済学に詳しく短歌にも詳しい読書家で、どこかの書店で偶然手にとったものらしい。御札に、わたしの編集発行していた冊子「あまだむ」を添えた。以来、一号送るごとに読後感想を書いた長い手紙をいただくようになった。「あまだむ」から「八雁」まで、この二十年あまり手紙は必ず届いた。文字通り隅から隅まで、各作者の歌まで読んだ上でご自分の問題意識から書かれる手紙は、一人で読むにはもったいないようなものだった。

ところが、わたしの方は必ず返事を書いたという記憶がない。返事があるがなからうが、発行物を届けば、必ず長い手紙が届いたのである。

*

わたしは、篠原さんのお顔も、声すら知らない。経歴も知らない。ネット検索でもしてみればすぐにわかったのに、そんな気は一度も起こらなかった。あるとき誰かが、息子さんを亡くされて歌集を出版した篠原三郎さんが取材されている新聞記事を見つけてきた。それで朝日歌壇の投稿常連だったらしいことを知ったくらいのことである。

わたしの迂闊なせいもあるが、篠原さんは三冊もある歌集の一冊も送って来なかったし、学者としての経歴など過去の

ことは一切手紙に書かれなかつたせいもある。どの手紙も、深い教養と知識を背景に、現在ただいまの社会や短歌状況に對する飽くなき関心から、「あまだむ」「八雁」誌面の一作者の歌や文章にまで感想を加えてくださるものだった。差別や抑圧に憤り、ジェンダーにも敏感で、リベラルな感性をもつ方だったが、つねに関心の中心は現在にあって、自らを生成させてゆく柔軟さがあつた。いま、何がどのように動いているのか、そこで人は、自分は、どのように考え、生きていったらいいのか。そういう意識のもとに書かれる手紙に、私事や過去の業績など現れるべくもないのだった。

*

何年前だったか、いつもとは違う行間のずれたやや乱れた文字のお手紙をいただいた。眼球の癌で、片目を摘出したのだという。あんなに読書家の方が、といたましい思いがしたが、その文面は、勝手の違う不自由をかこちながらも、身体に障得を持つと世界がどう違って見えるのかと知的好奇心をもつて綴る篠原さんらしいものだった。眼球に癌ができるのは珍しいそうで医者が摘出した眼球をくださいというので「どうぞどうぞ」とさしあげましたよ、とほがらかだった。

片目で、「八雁」の小さな文字を読むのはどんなに大変だったかしのれないが、その後も手紙は届いた。以前とかわらず「歌会消息」や「石田比呂志資料集」や、隅々にまで目を通された手紙だった。申し訳なくて、またこういう交流も限り

のあることだという思いもひしひしと迫って、ずばらなわたしも間をおかず必ず返事を差し上げるようになった。

*

眼癌の転移を告げて来られたのは、二〇二二年五月四日付の手紙である。八雁六十三号の読後感想を書いたもので、冒頭二行目に「統櫛の木の下で」と「断想」が刺激的で夜中目をさますたびに思いだされ考えていました」とある。

わたしの文章は、「(伝統)」は個人によって発見され、個人によって創造されていくものだ」と末尾をしめくくつた、(伝統)についての体験的叙述で、たいしたものではない。木下長宏さんの「断想」は、ウクライナ問題を背景にナショナリズムと近代国家、美の問題について思考したもので、おそらく篠原さんはこの木下さんの問いかけを深く受け止めたのだと思われる。マルクスの「資本論」を語り、近代国家と資本主義を語り、木下さんが最後にあげた「美」の問題はカントの「判断力批判」に通底する姿勢と感じたと書く。さらに「63ページに高松ゆみ子さんがアマゾンの職場を詠んでいました」と、そこから英国ジャーナリストの書いたブラッドワースの著書『アマゾンの倉庫で絶望し、Uberの車で発狂した』に移り、あれこれの話題が続いて、最後につきぎのような追記があつた。

眼がんの転移があり、治療は一切しないことにしています
が、生きている限り、この時代を(耳もすっかり遠く

りましたが)よくよく見ていきたいと願っています。

*

七月初旬、八雁創刊十周年記念号へのお言葉をお願いした。書けるあいだにと、たちまち執筆して来られた。記念号の「アソシエーション」としての「八雁」である。

それを、領域の違う「市民科学通信」に掲載させてもらったという断りの手紙とコピー二通が、八月二十三日付で来た。手紙には次のようであった。

がんの力が強く、外に出れず、ほとんどベッドの中、トイレまでゆけるのがせいぜいです。当面、11月号刊行までは生き抜きたい、そののみです。

同封のコピーは、「Tさんへ」という書簡形式で、八月四日付執筆の「エーリッヒ・ケストナー著『動物会議』を思い返す」と、八月五日付執筆の「アソシエーションとしての協同」、それぞれ末尾に、自詠を一首添えてある。後者の歌は、

下腹部の圧迫感が強まれば息切れ激しく書くも叶わず
癌転移後、苦しんだ妹の姿が浮かんできて、たまらない思
いがした。

こんな状況にもかかわらず、八月末日に発送した八雁第十六十五号に対する読後感想の手紙は、九月三日付だった。いつもとは違う筆ペンの大きな文字である。まず、喜多昭夫さん

の「第一歌集への旅」に触れ、遠藤知恵子さんの「玉城徹の一首」が無いのを心配し、「草林集」の阿木津英末尾三首、高橋則子さんの「立秋まで」、上妻朱美さんの歌にも触れて、何の連想か、戦中派吉本隆明の活躍が戦後派世代のすぐれた文芸評論家をつくりだした、柄谷行人はそれのもっとも代表的な存在ではないでしょうか、と続く。

*

記念号は見てもらえないかも知れないと思つて、まだゲラの段階にあった座談会の社会詠・時事詠についての部分など、いくつかのコピーを添えて、手紙を書いた。書くうち、ついついもの調子で、柄谷行人の頭の良い躊躇いのない文体がどうもわたしには受け付けられないと書いてしまった。

篠原さんが柄谷行人に強い関心をもっていることを知っていたので、春頃、書棚にあった『マルクスその可能性の中心』を再読(たぶん)してみたが、やはり出会えなかつた。わたしに無用、と書棚に押し戻したのだった。

ただちに、九月十六日付返信が届いた。筆ペンで、乱れがちな文字ながら、十枚にもわたつて「阿木津さんにすっかり疎遠にされてしまっている柄谷行人」について、流麗とはいえない吃音めいた文体がきわめて魅力的であると書いた大澤真幸の文章を、きちんと出典ページ付きで引用しながら、『マルクスその可能性と中心』以来の紆余曲折は一冊二冊ではわかりづらいだろう、「わたしは彼を理解するのに10年以上か

かりました」と、諄々と書きつづられている。

生意気な若輩がどんなに耳を塞いでも、良いと信ずるものを熱情をこめて語りつづける、それこそが大切だと教えてくれる手紙であった。カントもマルクスもそのようにして教えてくださいましたと、わたしは書いた。

一通の絵葉書が届いたのは、しばらくしてからである。

けっこうなお手紙、ありがとうございます。なんどもなんども読み返し励まされています。大切にしたいお手紙でした。わたし友人だった近現史の専門家の半藤一利もそうで3B鉛筆でしこしこ原稿をかき、己の主義貫き通す人でした。

篠原さんはいつも過大なくらいに褒め言葉を書いてくださる方だったが、こんな言葉をいただくのは初めてのことだ。言葉が胸にしみ込むようだった。

*

十月十五日付の手紙は、苦痛がいくらかやわらいでいたのか、ペン字で、「社会詠」問題を考えつつ、玉城徹『茂吉の方法』、永田和宏『近代秀歌』『現代秀歌』を読んでいるとあって、玉城徹の「個人」と「個体」を区別する考え方に言及する。

十月二十三日付では、『茂吉の方法』を読みながら、「すっかり玉城ファンになってしまってます。カントはまさにその通りなんです。「近代化」がスタートしたときから、「危機

感」を伝えてくれます。例の「三批判」もそのための斗いですね。なにより底に流れる倫理感、そして実践的！」とある。

「八雁」11月号までにはアウトとなるかも知れないと思っただらば、あれやこれや痛みなどありますが生きております。楽しみにしてます。

10/23 しのはらさぶろう

*

永眠は十一月四日。十月三十日に発送した八雁記念号を見ることができたはずだ。あの重い冊子を手にとつてひらけたらどうか。

新刊 角田 純歌集

草の穂

ふうはりとかげを游がせるたりけり
うすらあかりのなかの白鷺

不識書院

定価 三〇〇〇円（税別）